洋学史家としての呉秀三先生

大久保　利　謙

私は幕末から明治にかけた文化史を勉強している者でございます。そういうことから呉先生の名著『箕作阮甫』や『シーボルト先生』を座右において多年学恩をうけております者の一人であります。私は先生の教を直接うけたことはございませんが、まだ学生時代の大正十四年の第六回極東熱帯医学会の際の医史料展覧会を拝見いたし、呉先生の医史料に関する解説の講演を拝聴いたしまして先生の風貌に接した憶い出があります。これが私の洋学との出会いでありました。

呉先生のご専門は精神医学と承知しますが、また医史学の方面にも手を染められ、とくにシーボルト研究では大著を残されました。これらはとかく先生の専門外の余業と考えられがちでありますが、決して余業ではなく、本格的な医学史の研究であり、わが国洋学史研究の先駆者でありました。この点を申し述べたいと思います。

先生の医史・洋学史の研究はお若い頃から同郷の富士川游先生とくんでなされたものでありまして、東西にわたるはなはだ広汎なものであります。詳しくは岡田さんの伝記に譲りまして、先生の論文「洋学の発展と明治維新」を中心としていささか先生の日本洋学史研究を考えてみたいと思います。この論文は昭和四年に史学会が編纂しました論文集『明治維新史研究』に、史学会の求めに応じて執筆寄稿されたものであります。昭和四年といいますと、史学界では維新史の研究がまだ黎明時代の頃でありまして、この論文集は学問的な維新史研究の先駆となるものであります。史学界各分野の一流の専門家二十五名がそれぞれ専門のテーマを執筆しているので、呉先生は洋学史の専門家として書いておられる。つまり

史学会では先生を洋学史研究の専門家の第一人者として寄稿を求めたのでありまして、医者の余業を掲載したのではありません。この一事でも先生の洋学史研究の価値がわかるのです。

それ以前は、日本の洋学史、蘭学史の体系を一応こしらえましたのは明治十年にでた大槻修二（如電）の『日本洋学年表』であります。いわば大槻家洋学史ですが、開拓の功績は大きいのです。その後新村出先生の断片的な洋学の研究がありましたが、いずれも纒った洋学史というものではありません。蘭学史、洋学史を歴史学者として系統的にまとめたのは、おそらく板沢武雄先生が最初でありましょう。この板沢さんは、昭和二年にオランダに留学してそれから洋学史の本格的研究を始められて基礎史料の調査蒐集を行って四年に帰国してそれから研究をまとめられまして、「蘭学の発達」を発表したのは昭和八年の十二月であります。また幸田成友先生は昭和三年に欧州留学、オランダで蘭学関係の調査をして帰られました。この二人は歴史学者として洋学史の草わけです。してみますと、それらより早い昭和四年にでましたこの「洋学の発展と明治維新」の先駆的意義がわかると思います。

さて「洋学の発展と明治維新」でありますが、これは、この度出版された『呉秀三著作集』の洋学編の中に入っていますが、原本では九〇頁という長篇の論文であります。洋学の概論と発展を極めて系統的に詳しく述べてあります。

洋学の発展というものを、広範な歴史の中で意義づけ、洋学の発展というものが、日本の近代化と日本の現代にどういう意味を持っているかを追求して、最後にこう結んでおられます。「之によって是を観ると、日本に於ける近世の科学（即ち洋学）の進歩発達は、明治文化の基礎をなし、それと同時にその余力を以て我開国を指導して明治の革新を平和の内に誘致したのである。是れ即はち斯学（洋学）の発展は明治維新に與かって力あることで、私の筆はただ日本近世の科学発展史に過ぎざりしといへ、私はかかる意味に於て読者のそれを推判されやう望むのである」。洋学の発展と明治維新との関係をまことに鮮明によく解明しておられます。

本文のはじめには、洋学の発祥を歴史的に考察されまして、洋学の基礎が外国語学にあるとして江戸時代のオランダ語

の学習を詳しく説明しておられます。これはその後の蘭学研究の先鞭といえましょう。このオランダ語学に江戸蘭学と長崎通詞蘭学の二方面であることを説き、それから各分野にはいって、天文学、暦学、地理学、医学、シーボルト、本草等の諸部門について、関係文献を列挙して詳説しておられます。そのほか、西洋史研究のことにも触れておられることで先生の視野の広いことがわかります。ですからこの一編は、最初の、そうして立派な洋学概論、洋学史論であります。

それから特筆すべきことは、江戸洋学のみならず、幕末洋学に及んでいることであります。西洋法学、とくに兵学、さらに洋式造船等のことがある。これは、先生の外祖父箕作阮甫先生が江戸蘭学の大成者であると同時に幕末洋学の発端であるからであります。そこに先生は、阮甫先生の女である母君から聞かれた幕末洋学者の生活の苦難な途について書いておられるのは感銘深いものがあります。洋学はまさに先生の家学であるわけで、先生の洋学史研究の由来が深く遠いことがわかります。

このようにみてまいりますと呉先生の医学史方面の研究はたんなる医学者の余業の医史研究ではなく、先生は立派な歴史家であり、秀れた科学史の大家であり、まして日本の洋学史や科学史の基礎を築いた人であると申さなければならないと思います。

（歴史学者）